

唯物論研究協会第40回研究大会シンポジウム  
「知の変容とモラルの溶解 —道徳的分断を乗り越えるために—」

現代日本における統治／道徳／知

三崎和志(東京慈恵会医科大学)

2017/11/11 神戸大学

発端

新自由主義下の規範

オッフエ「民主的資本主義に関する2 1/2の理論」

Claus Offe: ZWEIFINHALB THEORIEN ÜBER DEN DEMOKRATISCHEN KAPITALISMUS. In: *Transit 44* (Herbst 2013). *Europäische Revue: Zukunft der Demokratie* (German Edition) Verlag Neue Kritik. [Kindle Edition]

理論	機能様式の記述	正統化
①社会民主主義的、社会的市場経済	平等な政治的権利によって経済的不平等を一定是正	社会的公正
②市場リベラル (多元的リベラル)	政治:多元的利害の調整 経済:福利の確保、成長	個人の自由 社会の安定
③グローバル金融市場の駆動するポスト・デモクラシー	政治は市場の命令に服す 蓄積、効率、競争力、緊縮、「商品化」	?

ウェンディ・ブラウン『いかに民主主義は失われていくのか 新自由主義の見えざる攻撃』

(中井亜佐子訳、みすず書房 2017 33 頁)

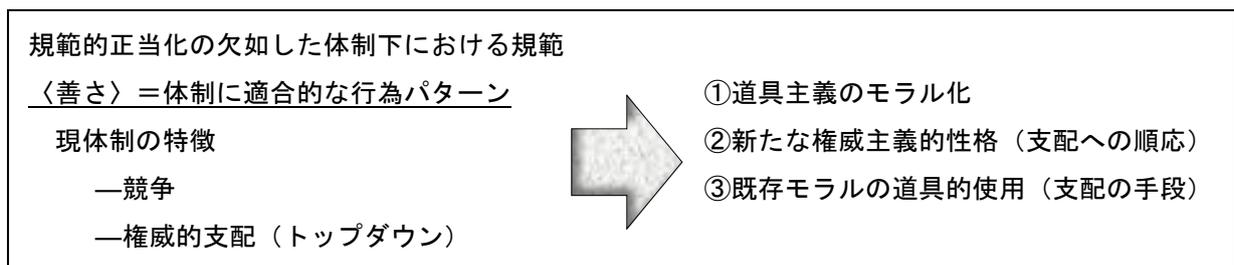
「…新自由主義が古典的な経済自由主義と異なる一つの点は、あらゆる領域が市場となり、あらゆる場所で市場の行為者とみなされることである。もう一つの相違点は、フーコーが強調したのだが、新自由主義的合理性にあっては、市場の根本原理と基本財として、競争が交換にとってかわる点である」。

ヨアヒム・ヒルシュ『国民的競争国家』

Joachim Hirsch: Der nationale Wettbewerbsstaat Staat, Demokratie und Politik im globalen Kapitalismus Berlin – Amsterdam(Edition ID-Archiv) 1996 (木原、中村訳、ミネルヴァ書房 1998)国民的競争国家＝市場自由主義的国家統制主義

- ・ 立地点競争に社会的資源全部を動員
- ・ 社会紛争を—必要なら暴力をもって—鎮静化、社会的利益を中性化、諸要求をはねつけることのできる強力な国家
- ・ 社会国家システムの中での不平等と差別が体系的に拡大される ⇒コスト削減、国家のくスリム化)[邦訳 182 頁]

- ・ 選別性の拡大:「労働力相互の競争が動員され、厄介な労働や低賃金を引き受ける準備として「業績」が強えられる
- ・ 「自由な市場」の含意[189 頁]
  - × 自立した私的生産者が出会い、諸勢力の自由な活動が繰り広げられる場所
  - 疑似国内経営として組み込まれ、行政によって調整、演出される、世界市場を志向する業績極大化のための制御手段
- ・ 「権威主義的国家主義の新たな形態」[182 頁]



#### ①道具主義のモラル化

- ・ 価値判断の尺度が「成功」
- ・ 競争に勝ち抜き「成功」を目指す。そのために手段の道徳性は問題にならない。
- ・ 各人は(不平等な)資源をそれぞれ自由に最大限利用する。

#### ②新たな権威主義的性格=性格なき性格

Jan Weyand : Zur Aktualität der Theorie des autoritären Charakters In: Vogt, Stefan. *Theorie des Faschismus - Kritik der Gesellschaft* (German Edition) Münster(Unrast Verlag) 2013 [Kindle Edition]

- ・ 商品形態と社会組織に媒介された個人の社会化では、自らをますます社会的に決定された機能に適応させなくてはならない
- ・ 個人は社会の機能の仮面に
- ・ 確固たる内的心理構造ではなく、転換する様々な機能に適応できる能力に秀でている。性格のないことがその性格

\* 操作的性格 (アドルノ)「今日の反ユダヤ主義とのたたかいのために」1962

Theoder W. Adorno: Zur Bekämpfung des Antisemitismus heute. In: *Gesammelte Schriften, Bd.20.1*, S. 373

- ・ ヒムラーや収容所所長のヘスのような情緒的に冷淡で、しがらみのない beziehungslos、機械的に管理するタイプ

#### ③既存モラルの道具的使用(支配の手段)

- ・ 権威的支配への服従を個人の道徳的徳として強いる  
⇒自己責任論、ブラックバイト、道徳の教科化、
- ・ 過去の権威的支配下の道徳は現代のそれにも「利用」可能(復古主義の現代性)

+現代的な「自己実現」「夢」

## 知とモラル

近代の出発点：ベーコン『ノヴム・オルガヌム』アフォリズム 129 から

- ①発見は人間の行動のうち最上級のもの⇒教養(個人の陶冶)  
 従来の知は「陳腐化」、既存の知の「習得」より「態度」の養成(アクティヴ・ラーニング)  
 共有のものと前提できる最低限の知識が欠落
  - ②新たな創造、神の技の模様⇒真理追究それ自体の価値、真理と価値の分離、実証主義  
 真理追究の意味喪失真理の絶対性への疑念(ポストモダン)
  - ③発見された事物の力と効能と結果(「知は力なり」)⇒社会的効用  
 経済的利益に矮小化
- 「ポスト・トゥルース」状況にそれぞれが関与

## イーグルトン『アフター・セオリー』

Terry Eagleton: *After Theory* Penguin Books 2004[Kindle Eedition] (小林章夫訳、筑摩書房 2005)

- ・ 知識と道徳とは究極的には分けられない。このことは人間同士が互いを知る場合に特にみられるもので、その中には創造力、感受性、感情の理解力といった、道徳的能力が含まれている。相手を知るとは[...]道徳的価値に縛られた知識なのだ。[邦訳 164 頁]
- ・ 無私無欲 disinterestedness (客観的認識)  
 近頃の文化左翼：まやかしの公平性  
 本来(18世紀)：私欲 self-interest の反対語
- ・ 無私無欲とは世界を崇高なオリンポスの丘のような場所から見るものではなく、一種の共感あるいは仲間意識である。相手の立場に立って考え、自分のことを忘れて、相手の喜び、悲しみを分かち合うことだ。[165 頁]

真理と価値に関する以前の議論	最近の展開
ヒューム: is から ought は導き出せない ムーア: 自然主義的誤謬  前提: 真理が先にある、真理⇒価値という議論	パトナム: 『存在論抜き倫理』 『真理/価値二分法の崩壊』 レヴィナス、プラグマティズム  議論の特徴: 真理と価値の一体性、価値の先行性

## アドルノ『ドイツ社会学における実証主義論争』序言

Theoder W. Adorno: Einleitung zum »Positivismusstreit in der deutschen Soziologie«. In: *Gesammelte Schriften Bd.8*, S. 345-346(『社会科学の論理』城塚、浜井訳、河出書房新社 1979 71 頁)

- ・ 厳格に非政治的な態度が政治的諸力の運動の中で指示的なものになり、権力への降伏になるのと同様、一般的な価値中立性は、実証主義が妥当する価値体系と呼ぶものに無反省に従属する

ことになる。

- ・ 価値と価値自由との二分法は保持されえない
- ・ 判断の真理の意味には、真なるものは偽なるものよりよいという「評価的」表象が含意されている。
- ・ しかしこの価値論的契機は判断の遂行に抽象的に対立するところにあるのではなく、この判断の遂行過程に内在している。

#### A. ヴェルマー「言明の真理を超える真理はあるか」

Albrecht Wellmer: *Wie Worte Sinn machen* Ffm(Suhrkamp) 2007

- ・ 真理をめぐる争いとは、真理が存在を持つ境域であり、この存在は、真理を新たに発見し、真理空間の中で位置取りをし、理由を挙げ、受け入れるよう繰り返し我々を強いるのである。[S.197]
- ・ 哲学で問題なのは、正しい世界理解と自己理解であり、そこでの正しさの基準は、世界がそれ自体としてある構造ではなく、我々の言語実践の内に根を下ろしている正しき生という理念である。[S.242]
- ・ この理念はつねに、限定的否定の途上でしか把握することができない。[S.243]

三崎「《真理空間》と《天使のまなざし》」(『季論21』10春 145-154頁) 参照

まとめ:

真理をめぐる争いは、その言明の背後にある「正しき生という理念」=価値観の総体をめぐるといえる。

ポスト・トゥルースへの批判

たんに事実と違うことを論証するのではなく、ある事柄を真理とするその価値観総体を議論する必要がある(しかじかの論拠であること真理と主張するのが「よい」のか?という議論もその中に含まれる)